

唐の都の樹木

はじめに 石田幹之助の名著『長安の春』の冒頭で著者は韋莊の詩からはじめて長安城の四季を一気に描いてみせる。この文章のなかで花木の描写が多いことに気づく。風景を描くには花や樹木は欠かせない要素となっているのである。

以前から都の風景に興味はあったが、発掘調査にかかわる身として都の樹木について思いを巡らす機会は大変に少ない。そこで、考古学が不得手な樹木の存在について考えてみた。日本の都城の手本となった唐の都について調べてみると相応の史料があったので、本稿では唐長安城の史料について整理してみたい。樹種については漢和辞典や潘富俊『唐詩植物図鑑』などを参考にした。

宮殿 唐長安城の宮城、大明宮の正門丹鳳門をくぐると、北には含元殿が聳え、その南側には広大な広場がひろがる。門と含元殿の間には龍首渠(清渠)が東西に流れ、その上には御橋と下馬橋がかかっていた(『雍録』閩本大明宮図)。この水渠にそって玉樹が植えられていた(李華『含元殿賦』)。玉樹とは槐(エンジュ)のことである。槐の樹高は10mをこえる。龍首渠を渡ると含元殿の前に至る。太和9年(835)4月の夜に大風が吹き含元殿前の樹木3本が倒壊した(『旧唐書』五行志)。殿前にはいく種かの樹木があったと思われる。

大明宮の中心軸線上には南から順に国家の大典を催す含元殿、通常の朝政をおこなう宣政殿、紫宸殿があった。官僚たちは早朝、大明宮南面の門から入って下馬橋を渡り含元殿の両脇を通って宣政殿に至る(『新唐書』儀衛志上)。宣政殿の南には宣政門があり、門前には菓樹が植えられていた。監察御史が樹下に立ち、門に入る官僚たちの態度や服装を監視した。宣政殿の殿庭には東西に4本の松(マツ)が植えてあった。官僚たちは松の下に位階順にならび皇帝の出御を待つのである(『文昌雜録』)。

朝政は紫宸殿でもおこなわれた。紫宸殿の殿前広場にも立ち位置を示す松があった。記事は東階の松にしか言及しないが、宣政殿と同様、東西にあったのだろう(『唐會要』巻25、『冊府元龜』巻108)。別の史料では、紫宸殿前に桜桃(ユスラウメ)があり、甘露がおりたという瑞祥を記録する(『資治通鑑』唐紀62)。殿庭には松のほかにも樹木があったことがうかがえる。

園林 大明宮の北半は太液池を中心とする園林であったが、その様子をうかがう史料は少ない。太液池は蓬莱池ともよばれ海の仙境を模したものだが、池には蓮が繁茂していた(王涯「秋思」)。発掘調査でも池底の堆積泥から蓮の花や葉が検出されている(『考古』2005年12期)。

池岸には竹藪があり、玄宗皇帝が弟たちと散策している様子が描かれている(『開元天寶遺事』天寶下 竹義)。池の中央にある蓬莱島には珍しい草木があったとあるが種類は不明である(『類編長安志』巻3)。

官庁 詔勅を起草する中書省は宣政殿の西にあり西掖ともよばれた。ここには梧桐(アオギリ)があり貞元3年(787)に鵲が巣をつくった記事(『旧唐書』五行志)のほか、杜甫が中書省の竹垣や梧桐のつくる木陰の様子を詩に表現している(杜甫「題省中院壁」、「送賈閣老出汝州」)。中書省の柳が一旦枯れたあと、しばらくして再生した様子を瑞祥として記録している例もある(『旧唐書』呂渭伝、『南部新書』甲)。

中書省に属する史館は大明宮ができた当初、門下省の南にあった。史館の門前には74本の棗(ナツメ)の木が東西に植えられていた(『旧唐書』職官志中書省 注)。

宮内警備を担当する金吾衛の役所、金吾左仗院には石榴(ザクロ)があった(『旧唐書』李訓伝)。尚書考功院は散官の格付けをおこなう考功省の建物で、庁の前には2本の桐(アオギリ?)が植えてあった(『朝野僉載』巻6)。玄宗が設けた翰林学士院は詔勅を起草する役所である。その第3庁におおきな槐の木があったことから槐庁とよばれ、ここに所属したものは宰相になることが多かったという(『続翰林志』)。礼察庁の南に古い松があって松庁とよばれた(『因話録』徴部)。このほかにも植えられた木の樹種から別名をもつ役所があったようだ。

場所は特定できないが、大明宮の樹種をうかがう記事がある。大明宮造営の責任者、梁孝(修)仁は宮内の殿庭に成長の速い白楊(ハコヤナギ)を植えたが、それは墓地に植える木だと聞いて慌てて梧桐に植え替えたとある(『新唐書』契苾何力伝、『唐會要』巻30 注)。樹種によって植える場所が決まっていたようだ。詩にも宮内の樹木が詠まれている。新緑や秋の柳(ヤナギ)をめでの詩(賈至「早朝大明宮呈兩省僚友」、蘇頌「人日重宴大明宮恩賜綵線人勝応制」、劉禹錫「春日退朝」)。雪を冠した松を描いた詩(韋応物「雪夜下朝呈省中一絶」)などがある。

城内記載の多い街路樹に注目してみたい。太極宮の正門、承天門の南側にあった槐の巨木は、隋が都城を造営する前から、とある村の門の木として植えられていたものであった(『旧唐書』五行志、『朝野僉載』巻1)。

太極宮の南には皇城があり、その正門が朱雀門である。朱雀門の南は南北にのびる長安城の中軸線、朱雀街である。幅155mの大通りはパリのシャンゼリゼ通り(幅124m)よりも広い。この通りを天街ともいい槐の並木から槐街とも呼ばれた(『冊府元龜』巻14引『中朝故事』)。開元2年(714)の大風で城内の街路樹や承天門の大槐が折れたこと(『朝野僉載』巻1)、永泰2年(766)の奏上によって城内の街路樹が整備されたこと(『唐会要』巻86 街巷、『冊府元龜』巻14 都邑2)、元和12年(817)の大雨雪で街路樹が折れたという記事から、朱雀街以外にも街路樹があったことがわかる(『旧唐書』五行志)。

街路樹の筆頭は槐であった。唐詩のなかにも六街、十二街(城内の大通りを指す)の槐や槐の花を読み込む詩が多い(韓愈「南内朝賀歸呈同官」、韋莊「驚秋」、王維「登樓歌」など)。貞元12年(796)に街路樹を槐から榆(ニレ)に植え替えたところ、街路樹は槐こそ正当だとの意見が出て槐にもどされた(『旧唐書』吳湊傳、『唐会要』巻86 街巷)。実際には榆も生えていたようで、5月には榆の莢(ニレの実)が城内に飛散していたから、春榆(ハルニレ)が植わっていたのだろう(『太平廣記』巻243 治生)。

槐、榆のほかに柳も使われていた。その様子は多くの詩にうたわれている(韓愈「早春呈水部張十八員外」、韋應物「擬古詩十二首」、曹松「武德殿朝退望九衢春色」など)。柳は垂柳、楊柳、煙柳などと表現されている。

開元28年(740)には街路に果樹が植えられたとある(『旧唐書』玄宗紀)。城内の街路樹は槐、柳、榆のほかにもいくつかの種類があったらしく、唐朝300年の長い歴史のなかで、時の嗜好や経済状況、環境などによって樹種が選ばれたこともあったのだろう。

おわりに どこに何が植えてあったかを中心に整理してきた。宮、城内ともに槐の記載が最も多く、主要な樹種であったことがわかる。このほか宮内では松、梧桐、棘、城内の街路樹は柳、榆などが植えられてたようだ。多少なりとも都の風景に色どりをそえることができた。

樹木の機能として興味深いのは樹木が官僚の立ち位置を示す例である。宣政殿、紫宸殿では松が目印であった

が、これは日本の紫宸殿前の左近桜、右近橘を想起させる。この制は桓武天皇のときに始まり、当初は桜ではなく梅であった。天徳4年(960)の内裏再建時に桜に変えた(『古事談』巻6)。この梅(ウメ)や立ち位置を示す樹木の制は大明宮紫宸殿の桜桃や松に由来すると考えたい。

こうした樹木の制は古く紀元前にあった。殿前の3本の槐には三公が立ち、その南には東西に各9本ずつの棘(サネブトナツメ)が植えられ、卿、大夫、公侯伯子男が整列する。群吏はその南に並ぶ(『周礼』秋官朝士)。唐代に中央省庁のことを「槐省棘署」と総称するのも、この故事に由来する(『唐大詔令集』巻73)。殿前の松については、漢代に松や柏は百木の長で宮闕を守る木だ、という思想と関連するのかもしれない(『史記』龜策傳)。

都の樹木はよく維持管理されており、使用する樹種も場所によってある程度決まっていたようだ。樹種が選択される基準、植える場所や配列など、樹種と空間配置の関係、さらにその思想的背景があきらかになればおもしろみもいっそう増すだろう。今後の課題としたい。

筆者は文献の専門家ではないので、本稿で取り上げた史料も玉石混淆、さらに遺漏や誤読も多分にあるとおもう。請多指正。(今井晃樹)

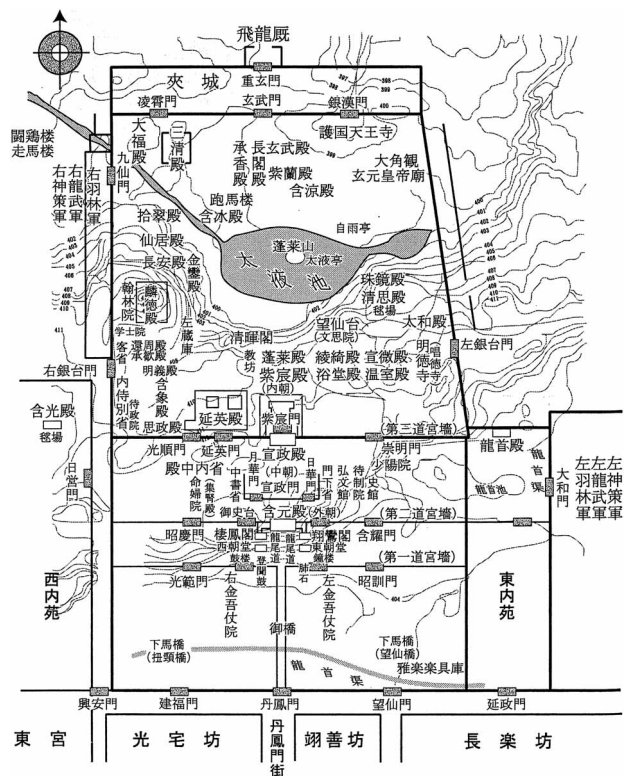


図15 唐大明宮平面図(妹尾達彦『長安の都市計画』図5を改変)